

1. 開会

池本副会長：第1回まちづくり協議会と総合支所の懇談会を開会します。

2. 会長あいさつ

内山会長：ご多用の中おあつまりいただきありがとうございます。

また、場の設定にご尽力いただいた、河島支所長、総合支所職員の皆様には厚くお礼申しあげます。講演をお願いしたところ、快く引きうけていただいた金田様には、ありがとうございます。社会が拡大社会から縮小社会に転換したが、こういう社会にあって、今後、どのようにまちをつくっていくかについて、まちづくり協議会があるが、この問題について、まちづくり協議会だけの問題だけでなく、行政とまちづくり協議会が両輪でやっていくものだと言い続けてきた。そこがちぐはぐでうまくできなかったが、今回この場をもつことができ、大変うれしく思っている。今回で終わりではなく、第2回、第3回に結び付けて、菊川が本当に安心して住める、住みやすいまちにみんなでどのようにもっていくかということを考えていきたい。まちづくり協議会が、雇用の場をつくるために工業団地をつくれとか、観光客を呼ぶためにリゾートをつくれなどは一切言うつもりはない。高齢化して人口が減っていくまちにあって、みんなで支えあっていくまちを、小さなことを積みあげていくまちづくりをしていきたいと考えているため、今後とも、どうぞよろしくお願ひしたい。

3. 河島総合支所長あいさつ

河島支所長：やっと、まちづくり協議会とこのような場が設けられた。豊田に7年間いたが、4総合支所あるが、温度差がある。その中で、菊川は27年に一番最初に発足し、いろいろな事業やってこられた。それは地域の課題を踏まえながらみんなで作えながらやってこられたと思う。地域の身近な課題を、まちづくり協議会と一番近い総合支所である行政が、協力して同じ方向でやっていけるものはたくさんあると思う。今日を契機としてそういう取り組みも今後できたら良いと思う。行政は何かあると、金がない々というが、知恵を拝借しながら、金がないでもできることはたくさんあると思うため、ご指導ご鞭撻をお願いする。なお、金田さんには快くお引き受けいただき、誠にありがとうございます。十分に拝聴させていただきたい。

4. 日程説明

池本副会長：荒小田北自治会にお住いの、金田仁司さんに、「まちづくり作戦」と題して講演をいただき、その後、懇談会に運ばせていただきたい。懇談会終了後、隣の部屋で交流会を行う。

なお、懇談会の終了時間を、5時20分とさせていただいていますので、ご理解、ご協力をお願いしたい。特に休憩は挟みませんので、トイレ等のご自由に退席ください。

講演の前に、金田さんの紹介をさせていただきたい。

ご紹介するまでもなく、皆さんご存知と思いますが、改めてご紹介いたします。

金田様は、荒小田北自治会にお住まいの、昭和8年のお生まれで84歳になら

れました。

昭和52年から3期12年、町議会議員に就かれ、昭和62年5月から平成2年4月まで、第17代副議長さんを、平成2年4月から平成3年4月まで、第19代議長さんを歴任されました。

合併後は、市総合計画審議会や旧4町に設置された地域審議会でもご活躍され、長きにわたり地域振興に尽力されております。

そして、本日のご講演の主題であります、環境保全型農業に早くからとり組まれ、平成4年3月に設立された「レインボー稲作研究会」を推進母体とし、アイガモ農法や、学校給食の完全米飯化にも貢献された人物でございます。

さらには、NHKラジオ番組の「ラジオ深夜便」にも出演されるなど、幅広くご活躍されています。

それでは、さっそくご講演をお願いいたします。

5. 講 話

金田講師：ただいま身に余るご紹介をいただき、恐縮しているところです。

皆様方には平素は“まちづくり”にご尽力をいただき、心から敬意と感謝を申し上げます。

私も84歳と年をとり、最近では難聴にもなり、体力も行動力も衰えて来ましたが、わがまちが他の町よりも明るい町、開けた町、希望のもてる町になるようにという気持ちを持っている中で、このような席をいただき、有難いと思っております。今回、このように支所と合同の協議会がもたれることは画期的なことで、素晴らしいことと思っております。

今までも何回かこのような合同の会議をもつことの必要性を話しては来ましたが、実現しませんでした。

まちづくりの拠点は何と申しましても総合支所にあるわけでございます。各分野のそれぞれが町の現状と将来を考えながら協議会と連携しながら進めて行くことが基本であり、今日をスタートとして明るい町に前進して行くことを期待しております。

私も議会に12年お世話になった。その前の昭和51年、県で指導農業士の制度ができて、その認定を受け、県の農林部の方々の指導を受けながら交流がありました。議会に出ようと思い、お世話になっている人に相談「是非出なさい」と言われた。(歳で5つ上の人で県でも話の通る人であった。)

ついては、下水道と農政の問題で勉強したいので、その橋渡しをお願いし実現した。日時を決め県庁に行き、「下水道対策室」で1時間、農政課で1時間勉強させてもらった。下水道については、前年に国が「下水道事業を都市から農村へ」と方向転換の情報を聞いていたので、できることなら、菊川町中心である田部と荒小田地区に実施できないかと思い、勉強し議会に出た。当時は44歳で一番若く私の次に若い人が6歳上の人であった。役場の偉い人は私をよく知っておられ、なかなか頭ごなしで議論にならなかったが、しかしそれなりによく理解をされたと思う。そして議会に出てから県の職員から時々「その後どうですか？」又、時

に事業等の説明を聞く機会をつくってくれたりで、そうした関係ができたのは私自身、有難かったと思います。

当時、町の基本構想にも消費者ニーズを考えながら安全な食糧生産をとりあげ、その後の環境保全型農業をはじめ幅広く事業に取り組むことに繋がったと思います。12年間議会に務めさせてもらったその間、ナカオ梯子の工場誘致又、今カネヤスのところにあった KDD、これらの工場誘致も、“安全な菊川町”のパンフレットで決まるようなものではなく、大変苦勞されたと思う。又、その期間中に中学校以外、各小学校の改築がありました。その中で全校にランチルームを建設した。これは現在でも町内全校にランチルームがあるのは県下でも他にないと思う。菊川町の教育に対する意識が高かった現れである。

こうしたなかで、安全な米や野菜の生産をめざしている。平成3年にグリーンコープ生協連合から安全な米（減農薬米）1,000俵を購入したい旨の連絡があり、農協を中心に対応して行くことになった。同じ生産をするなら無農薬米の生産をと思い、鹿児島県、熊本など4県に出向き勉強したが結果的に菊川では、アイガモ農法でしか実現はむつかしいと判断し、平成5年からアイガモ農法を取り入れることになった。

平成6年か7年には町より「環境保全型農業推進事業として、これから安全な農産物の推進に取り組む」と話があるも、私達は「あれこれと規制が付いて来るようなら断る」と云ったが、「その心配はない」との事で、県下で一番にこの事業を取り入れることになった。その後、他の町がこの事業に取り組む状況等を聞くときに、いち早く取り入れて進めているわが町はすばらしいと思った。環境保全型農業の推進と云っても、消費者が安全なものと、又一方では価格の安いものと両極が求められるなかで、食べ物が大きく変化して、今日では日本人の癌の発生が2人に1人にまでなってきました。今日の医学進歩はめざましいと思いますが、それでも癌が減らないのは、その元となる食にあると思いますし、食の源は農にあると、その理念のもとに取り組んできました。

私は28歳の時、の昭和36年2月、三重県で25日間の研修を受けた。その時の会長の言葉「人間は食べ物が狂ったら、どんなに医学が進んでも病人は減らない。農業は食べ物を生産する職業である。国民の命と健康を守るという使命感に燃えて取り組み」「米をつくる前に先ず人間であれ」「人間には良心という心がある」という教育を受けた。この教育は今も私の脳裏から離れることはない。

あれから56年、今日の状況はまさに、その教えの通りだと思う。

私はその一念で農業生産に取り組み、学校給食に米飯をとり入れ、野菜もできる限り地元生産のものを食べさせたいと努力をし、平成14年から野菜、16年から週5日地元米の米飯、26年からその米もカントリーエレベーターのエコ米となることができた。

平成2年に北九州市で堂園と云う医師（鹿児島市で産婦人科医であるが、アトピーの先覚医）の話しを聞く。アトピー患者のお母さんに「元は食べ物である。江戸時代の食べ物を与えなさい。と、それは、その時代にはアトピーはなかった。

と云っても困難なので昭和30年代前半に全盛であった女性に聞きなさい」。平成15年、米国のマクガヴァン上院議員が議会で演説「米国は現在の食生活を続けたら肥満と心臓病で滅びる。これからは日本型食生活を参考にすべきだ。その時、江戸時代の食べ物をと言っている。

そこで、江戸時代の食を調べてみると、塩を除くと全て地産地消である。私が若い頃に「3里四方で採れた物を食べれば病知らず」とよく言われた。それらを考えると、やはり基本は地産地消であり、旬のものである。

菊川町は、環境保全型農業を推進して来たが、その基本は耕畜連携で、畜産農家の堆肥を堆肥センターで良質の堆肥にして、米や野菜の耕種農家が利用しやすいようにして、土づくりを基本とした「人にも環境にも優しい農業のまち菊川町」めざしてきた。そして、ふるさと市の会員とレインボー稲作研究会を対象としてスタートをし、後にゆず部会も入ってきた。堆肥センターも事業で進めてきたが、更新になり新たに町の施設として現在の堆肥センターができています。

平成10年～12年頃に前防府市長の吉井淳一さんにふるさと市で出逢う（この人はよく存じた仲）「市長さん、ここまで来られるのですか？」と聞くと、「県下の産直市場めぐりをしている。菊川は2回目だ。菊川の野菜は他の所と違う、美味しい」と云われたので、「菊川町は環境保全型農業推進で土作りを基本とした安全な作物の生産に取り組んでいる」と話すと、「菊川町のように町をあげて取り組んでいるところは他にない。それが他の所と違うんだ。それだよ」と云われた。

また、北九州など他地区から菊川町に移り住んでよかったと云われた女性の方が共通しているのは、3人共、本人又家族の中に喘息の人がいると云われたが、3人共「菊川町に来て「ふるさと市で野菜を求めて生活しているうちに喘息が治った。本当に菊川町に来て良かった」と云われた。

そうした話を聞くなかで、平成17年2月下関市との合併をする時に県下でも4～5しかない人口微増のまちになった。勿論、下水道の進捗も合せて“住みたくなる町”になって来たと思う。

菊川町は以前から観光資源の乏しいまちで、お客の集客数も他の地区に比較にならない程少ない。

最近アメリカの観光会社の選ぶベスト31に長門市の「元乃隅稻荷神社」が選ばれたことで、大変なお客のようだ。又、豊北町の道の駅、豊田町の道の駅もイベントを繰り返しながら集客に努力をしてお客さんも多いようだが、それはそれとして良い事だが、人口減少を止めることには繋がらない。では、菊川町がこれからの進めるまちづくりは何を求めて行くべきか。と考えると、農業面は安心安全を重視した農・食・健康（命）につながって行く構想、運動に広く町民全体参加型で進めて、住みたくなる魅力ある町をめざしたらどうかと思う。

これまで、協議会の方にも「まちづくりは大変なことだが、わかり易くするために先ず、絵を書いた方が良いと思うと云った。文章だけより絵にすると自分の位置と目標がわかって来る。

昨年5月に自分なりの絵を書いてみた。菊川町は基幹産業が農業である為に、農

業を含めたまちづくりの姿が良いと思う。昨年2月の“まちづくりセミナー”の際に、三重県名張市の「桔梗が丘」、伊賀市「桐が丘」の方の講演を聞きました。私は、昭和35年から近鉄大阪線の桔梗が丘の所を通っており、当時は広い山の中に駅舎だけ。でも、多くのブルドーザーが山を開いて4,000人の住宅団地を作る計画が進められて、39年入植開始の団地、又、桐が丘団地は、私が36年にお世話になった愛農学園の隣で、山を開いて作った団地は同じようでした。これからの菊川町のまちづくりは、住民総参加型。そのためには、農業もその一端を担って行くときに、地方創生に合ったスタイルにもなるのではないかと考えている。

考えてみると、今から環境保全型農業の復活は大変な事だと思う。市と合併をして菊川のみそんな事業は認められないと云って切られて、あれから12年のブランクは本当にむつかしくして来た。(でも、皆んなで方向を定めて邁進すれば不可能ではない)

平成17年2月に合併。17年度から環境保全型事業は切られたが、国は17年12月に有機農業推進法を制定し、広く有機農業を奨めることになった。

翌年、ある人を介して市農林部長に国の方針のなかで、有機農業或いは菊川町のような環境保全型農業を考えてはどうかとお話しをしたが、そのような考えはない、お金もないと云って一蹴された。

去年、2020年の東京オリンピックでIOCから「選手村で使う食材はすべてJAS(有機農産物)の認定を受けた物を利用して下さい」との申し入れがあり、東京近辺のみでなく、全国的に農家、農業法人、企業を含めてそういう方向に進んできつつあります。

先般、市の農林部長にお逢いする機会があつて、そのことを申し上げると、元の部長さんとは少し変わったかなと感じました。

又、県の職員との話で、有機農業や環境保全型農業の推進について前向きになったように感じた。

国や県の指導を得ながら協議会で取り上げ、地域を盛り上げながら総合支所との連携をして行くことが大切と思う。絵の中で特に「身土不二」は、健康を求める理念は身体も土も同じである。土作りを基本として安全な農産物の生産の意味であり、それが「身土不二」に繋がって行くものと考えております。

今日の食をみますと、内容の洋風化、味も食材の味から調味料による味になるなど、食の基本的な考えが失われて来た感じがします。「医食同源」とは、健康な生活を求めていくときに、医と食は元は同じですよと云う意味です。

日本には日本型食生活というすばらしい、ユネスコに登録された世界に誇る食文化があるのです。良い食材を利用し健康につながる料理を探求し、それを広く町に広め、そして又、スポーツ等、他のグループも各々の立場から、それぞれの活動を通して健康づくりに対し補完し合って行くときに、健康づくりの成果があるのだと思います。

最近、農村での交流が求められ、グリーンツーリズムが盛んになり、国内のみで

はなく、海外からも単なる旅行でなく、滞在しながらの交流が増えておりますが、それを、農・食・命の関連を重んじた“命のツーリズム”と云われ広まりつつあるようです。

「身土不二」「医食同源」の考えの元で行われる交流は命のツーリズムと云った良い交流だと思います。

ホームステイなど、滞在型となると引き受け側が大変ご苦労されると思います。私も以前、高校の実習生をを11ヶ月間引き受けて、コメと養鶏の実習をしましたが、その間家内は大変気を遣ったと思う。

福島県北部に、熱塩加納村（現在は合併になり北方市熱塩加納町）があり、有機農業の進んだ村で安全な米、野菜を学校給食に活用する。その栄養教諭、坂内幸子さんはNHKで全国放送に出た人ですが、給食献立や地元産を利用、それに、生徒への食育が素晴らしい。あるお母さんが夕食にスーパーでサラダを買って帰ったら、子供が「そんなの買ったらダメ、食材を買って内で作る方が良い」。お母さんは困った時には学校からの献立表を見て作っているとのことですが、その熱塩加納村、将来のグリーンツーリズムへの対応を考えて、若い母さん15人が研修でドイツに行き、全員が別々のホームステイで、ありのままのもてなしの研修をされた。

言葉の通じない中で、別々に環境のまったく違う家に入っただけの事を思っても大変だったろうと思いますが、でも、かけがえのない最高の研修であったとのことでした。

これからの命のツーリズムも普段の姿での交流でなければ長く続かないと思いますし、これを広げて行くことが必要と思います。

少し前になりますが、農水省職員が一時的に地方に出て現場を見て来ると云うことで、11月のある日に1日、我が家に来ました。まず、8時半から9時40分まで手袋をして、ブロッコリーのアオムシ取りをし、彼も100匹くらい取りお茶にした。

その時に彼が「アオムシを取ったらいくらになる」と云った。そのときにお金と命とどちらが大切かと云った、そして、残留農薬の問題をはじめ、健康と農薬等に関する本を7～8冊見せたら、考え方が少し変わったようであった。

今、2人に1人が癌と云われておりますが、大部分の癌は生活習慣病に属すと云われておりますし、その要因は食べ物と思います。

その元は残留農薬と食品添加物に起因すると思う。残留農薬で云いますと、私達が生産しているすべての農産物は、それに使用するすべての農薬の残留基準は0.01ppmですが、現在輸入されている例えば小麦は、ポストハーベスト農薬と云って、既に調整してあるものを船積み前に散布する薬を使用しています。国内産は収穫前の使用ですから違うわけですが。小麦には殺虫剤としてマラチオンと云う有機燐製剤が使用され、その残留基準は8ppmです。そして、この薬は、臭いが強いので脱臭剤を散布し、更にこれらをスプレーで散布し、直後に熱風で乾かすも乾燥にムラが生じ、カビの発生の恐れがあるために、防カビ剤も散布され

るのです。

国内産より残留基準で800倍緩い小麦を日本人は毎年500万t以上食べているのです。

現在この基準はWHO（世界保健機構）WTO（国際貿易機構）で認められているので、どうすることも出来ません。

こうした輸入農産物にはどうしてもこのような農薬が使用されているので、国内産を求めることが大切なのです。

私が学校給食に米飯を要求したのも子供の健康を考える上で輸入小麦のパン食から逃れるためです。

今、山口県では学校給食のパンに使用する小麦は県内産にしたと聞いております。こうした農薬によっての影響が大きいと云われているのに、一つはアレルギーと環境ホルモンに依る妊娠障害等と云われております。

又、一方、食品添加物の問題はどうしても防ぐことはできませんが、食品添加物のエリートの阿部司さんは、現在の食べ物は簡単で時間がかからず、味がまろやかで、安くて便利だが、その代償も大きいと云われ、添加物を避けようと思えば、一食でも多く自分が料理をすることだと云われる。家庭で自分が作って食べる物には味の素も使わないだろうが、外に出て食べれば使用していない物はないと思う。

私は、時々学校給食をランチルームで一緒に食べておりますが、とても美味しく生徒もきれいに食べております。栄養教諭の先生に味の素を使われるかと尋ねると使わないと云われました。

各校の校長先生も、ここの給食は本当に美味しいと云われ、又、少し前の菊中の校長先生は、前任地の学校では、給食が終わる頃には、残飯回収車が来ていたが、菊中ではきれいに食べているので、その必要はない。

その校長先生は、ここの給食は県下一と思うとも話された。

食と健康を考えたときに給食の影響は大きいと思います。

今、各学校で挨拶運動がなされ、挨拶を交わすことは良いことと思う。

菊中の生徒が、私が畑に居るときに「こんにちは」と大きな声で、時には15mくらい道から離れて聞こえ、頭をあげて周囲を見て誰もいないため、私にして呉れたのでした。

又、小学生の低学年生は、なかなか声が出ないが、そんな時は、こちらから云う、3日云うと次の日から生徒の方から挨拶ができるようになる。

このように常に声をかえ合うことは関心をもつこととなり、非行の早期発見や見守りにもなり大切なことと思います。

岡枝小学校では育友会という形で、生徒のいない家庭でも会費を納めて地域全体で学校教育後援することは良いことで、このように教育環境が良くて学生が素直に成長していることは、町づくりの魅力としても大きいものがあると思います。

百姓一筋で今日まで生きて私が描いたまちづくりのイメージ図の絵です。この絵をたたき台にして協議され、これからの菊川町のまちづくりにふさわしい絵をま

とめられて前進されることを願っております。

まちづくりの発展を祈念して、話しを終わります。有難うございました。16:40

池本副会長： 本来であれば、質問等もあろうが、時間が迫っているため、後程の交流会でここで、会長がお礼の言葉を述べます。

内山会長： ありがとうございます。金田さんの食に対する熱い気持ちがよくわかった。

私も米作りをしているが、金田さんの熱いお気持ちとは裏腹に、だんだん農業者が減ってくる中で、逆に省力化の一環として農薬をどんどん使うようになってきている。苗箱ひとつ作るにしても、種もみの消毒はするし、農薬を使うシステムになってきている。

金田さんの熱い思いからすれば、環境保全型農業は本当に大事だと思っていますので、やっぱり子供たちの健康あるいは、将来の日本人の健康を考え、これからも金田さんにはしっかりやっていただきたいと思ひますし、まちづくり協議会としても、そういうところを考えてやっていきたいと考えている。ありがとうございます。

6. 懇談会

池本副会長： 次の懇談会に運ばせていただきます。

資料は、これは、懇談会開催にあたり、運営委員と支所から意見が出ている。

資料の内容を踏まえ、意見をいただきたい。

意見の内容も様々で、今日、結論を出すとかどうするかということではないため、指名はしないので、意見をだされたい。

資料以外でも結構ですのでお願いしたい。

強み、魅力がありその付加価値を高めるためにということで意見が出されているが、補足等もあればお願いしたい。

だいたい内容は同じものが多い。生活環境は、自然が美しいが表現されている。

もうひとつには、金田さんの話にもあったように立地条件や住む場所が非常に良い。交通条件や、土地柄を含めて・・・

河島支所長： 良い機会であるので、3課長は菊川町以外からこられたということで、ある意味、外からみた菊川町の新しい感覚を、仕事を離れた自然な形で突端として小出しにお願いしたい。良いところもひとつお願いしたい。

前田課長： 菊川には今年で2年目となる。もともと本庁採用で、3年豊北に居て、その後菊川になる。家は美祢市ですが、美祢市も過疎化が酷く、周りも高齢者ばかりとなっており、菊川も同じような状況と思う。豊北のときは、道の駅をを担当しており、右肩上がりではっきり言って楽しかった。来訪者も46万人とすごい人数で、秋吉台の観光客より多く、それほど美祢市は寂れている。

若い人の働く場所がなく、どんどん外に出ていく。高齢者ばかりで。かなり身に染みる状況である。

今後は、人口が増えればありがたいが、あえて、田舎をアピールすべきではないかと思う。

今は情報発信のツールを使ってどんどん売り出すことが一番良いと思う。

農業部門など得意な分野を伸ばしていくしかないのかなと思う。すぐには解決しない問題で、解決すると、日本全国すべて増えてしまうので、できることから、特に田舎をアピールすべきと思う。

山田参事：7月に赴任し、3か月ちょっとなる。前任は、本庁のまちなみ住環境整備課で、私はもともと建築技師で、本庁6階の建設部や都市整備部に40年間居て、はじめてきたところが菊川の農林課ということです。農業は全然知らず、前任で、歌野清流庵を景観建造物に指定した際に、その行事で、生まれて初めて田植えをしたなどの機会程度のもので、菊川のこと詳しく見れていないが、辛口だがあまり良いと思うところは少ない。

さきほど言いましたが、本庁に居たので、仕事で使うことはあっても10年くらい前に車を止めた。

本庁管内では、バスや電車で移動できるため、車に乗る必要はなかった。また、住まいが下関駅のすぐそばの東大和町で、遊びも小倉に行くので、バスを10分以上待つことがない。そういうことからすると、電車で小月駅まで行くのは良いが、小月から田部までのバスの本数が少なく、時間通りに来たこともない。小月駅発の便は良いが、10分以上遅れて来る。

その代わりに、田部のバス停から支所まで歩くときに、子供さんなどとすれ違うときに、あいさつをするのは、初めての感覚であった。私の子供の頃も大人にあいさつすることもあまりなかった。こちらの子供は朴訥としてかわいいな、ちゃんとあいさつをするんだなど、新鮮に驚いているところもある。

交通機関の問題などいろいろな問題もあるが、思ったより住みやすいという感じは持っている。なかなか、ここでどうしたら良いということはいえないが、いろんなところをみて、菊川の魅力を発見してみたい。

船木課長：昨年の4月に配属になった。1年6か月、菊川を見てきた。

生まれも育ちも下関駅の近くで、こういう田園風景を見る機会もほとんどなかったが、通う中で、菊川は知っていたが、止まってどうかすることではなく、ただ通過するだけであった。地名もむつかしく、電話で聞かれても、ゼンリンでさがしてもわからないが、最初のころからは分かってきた。

人口減少については、本庁でもそうであるが、小さい頃は、小学校の頃は学年4クラスあって、中学校は9クラスあり、一クラス50人で1学年450人居た。今は、中学校でも1~2クラスしかない。小学校でも今、唐戸に住んでいるが、一クラスで学年で20数人しかおらず、運動会も非常にさみしい。全体で100人くらいしかおらず、その分、出る競技はたくさんあるが、自分のころよりは少ないと言う感じ。

なんとか人口を増やしたいが、全国の問題であり、菊川も人を呼んで住んでもらいたい、特産品としてソーメンがあるが、それを前に出してアピールしたらと思う。

道の駅の名称で、一番最初にできた道の駅ということで、道の駅きくがわとなっているが、後でできた豊北、豊田は、何々街道と付けられているので、菊川も、

下関3つあるので、ソーメン街道でも良いが、市全体でアピールできたらと思う。

池本副会長：各課長さん、ありがとうございます。異動しないように願いたい。

生活環境で強み魅力で自然が美しいや住みよいなどが出ているが、価値を高めるにはということで、まちづくり協議会の運営委員の方にご意見をいただきたい。

総合支所もご指導願いたい。

2番目に、産業、特産品、観光資源として、さきほどもあったが、基幹産業の農業と温泉がたくさん出ている。そのあたりでご意見がありましたらいかがでしょう。運営委員の方でいかがですか

森本副会長：菊川温泉の水量について、昔はプールができる前に、町民が温泉を汲んで帰り、自宅の風呂に入れていた時期があったが、湯量的な問題もあるが、町民の方にやさしく、菊川を愛していただくためにもそういうことができたらと思う。私もその当時、ポリ容器がかなり必要であったため、特定農業法人で準備したものを利用して、家で風呂に入りましようとしてやっていたがいかがか。

阿部次長：船場地域だけでなく広くやっていたのか

森本副会長：そうです。湯量がけっこうあったので。

??：どこですか

森本副会長：温泉プールの入り口

河島支所長：全部温泉の方がいいんでしょうね・・・

森本副会長：その方がよかろう。

河島支所長：1800から2000は必要だ。

森本副会長：ポリ容器に毎日汲んで帰るのは大変なので、風呂の半分など・・・

河島支所長：何かの年一回のイベントで考えられなくはない。たくさん来られたら、1800を持って帰るのは大変だろうが、何かのイベントで考えられなくはない。

森本副会長：年配の方は知っておられるだろうが・・・

河島支所長：温泉のイベントはないのか

前田課長：温泉祭りがある

河島支所長：そのような機会にどうだろう

温泉の素はあるが・・・

内山会長：防災無線があるが、最近、ゲリラ豪雨等であちこちの地区で災害が起きており、山口県はそれほどではないといいながら、何が起こるかわからない。厚狭でも大きな水害が起きている。そういうことからすると、防災無線は、大風が吹いたり、ちょっとした雨が降ると全然聞こえないため、市役所でその話をする、そんな時代ではなくパソコンでどんどん配信する時代ですという言い方を。高齢化がどんどん進む中で、パソコンを使える人がどれだけいると思いますか。昔のような各家庭に電話みたいなものがあったり、無理なら、お年寄りだけでも防災ラジオのようなものを持たせるとか。そういうふうなところから考えていくことがまちづくりと思う。考えてください。

川尻課長：早めの広報なりはするし、みなさんもテレビなどで台風がくる、雨はゲリラです。誰でも予測はできないが、広報車も回します。機器がある間は管理するが、新

設の要望は聞きますが、右から左にやりますということにはならない。今日はそのあたりで、早めの広報をしたいと思う。

内山会長：独居老人が増えてくる中で、久野は独居老人が多いが、やっぱり、そういうような人への情報を与えないといけない。

川尻課長：地域での声かけはどうしているのか。

内山会長：みんなでやろうとしていることにしているが、裏山が崩れたという事例も久野ではあり、その中で、隣に声をかける間もないと思う。

川尻課長：ご要望として受けます。

内山会長：最近、また台風・・・？

池本副会長：中山間の基幹産業は農業であるが、私もそのようないろいろなことに携わっており、重点品目の継続と書いているが、鮮度、品質もあるが、海老芋やゆずも出たが長続きしていない。何か問題点があるのかと思う。

金田講師：確かにむつかしい問題ですが、それでも海老芋部会もゆず部会も高齢化は進んでおりますが、各々活動を続けております。

レインボー稲作研究会も、発足25年になります。高齢化は進んでおりますが、でも、24名おります。

グリーンコープの方からは、前年の12月に協議会が開催されて、翌年の産地ごとの出荷数の決定が示されるのです。

参加JA等産地側は、播種前の目標なので各自、少しでも多くと思っておりますが、全体で年々消費量が減っているのです、それに順じて減っております。私たちレインボーに対して少しずつ増やして、初めは1,000俵であったのが、今年は1,500俵まで増やしてくれて、目標達成に苦労しておりますが有難いことです。

少し前のことですが、冷夏長雨で、アイガモ米約450俵全量3等となりました。(生協買上げは1、2等のみ)

そこで現物を持って買上げのお願いに行きました。すると先ず50万円の見舞金が来まして、そして、12月20日の産地協議会後に買上げを決定して最終的には奨励金を含めて18,000円で全量買上げとなりました。

これは、やっぱり顔の見えるつきあいの中で心からの信頼関係があったからのことだと思っています。

これからは農業だけでなくすべてに相互の信頼関係が大切だと思います。

池本副会長：次は課題の方に入っていきたい。

書き方はいろいろあるが、交通関係、防犯、防災、今頃空き家の問題も大きい。高齢化、働く場所、交通環境も弱いとある。いろいろ検討し、重点項目、優先順位はどれだとまちづくりも、できるところからぼちぼち進めていきたい。

みなさんから、何かあればお願いしたい。

山田参事：空き家空き地増加の中で、前職で空き家等対策を進めていたので、PRも兼ねて発言したい。今担当しているのが、建設部の住宅政策課で、当時から、奇数月の第三土曜日に色んなところに出て行って、空き家対策の説明会や個別の無料相談を行っており、来年の1月にアブニールで、下関市空き家対策説明会と宅地建物

取引業者や司法書士などが来て個別相談会もするため、逆に空き家の問題を持っている方だけではなく、今後、父親が一人で住んでいるなど、空き家になりそうだなという方も相談できるし、まちづくり協議会の方も一度聞かれると良いと思う。

平成26年度の調査では、菊川町に空き家は205件ある。

内山会長：空き家問題は、昨日の日経新聞にも出ており、テレビでもやっていたが、主人を亡くして、高齢でこんな山に暮らしたくないや、こんな都会のごみごみした中で、一人でいるのはいやだから田舎に引っ越したいなど、いろいろな人がいる。そんな人と大家の橋渡しを、行政ではなく社会福祉協議会がやっているようだ。行政が橋渡しの間に入ると、いろんなからみがあってむづかしいかもしれない。そういうふうなやり方も参考になるのでは、ぜひ見ていただきたい。

山田参事：マッチングはすでに、本庁管内では、宅建業者と協定を結んでやっているし、本庁の企画課で4町の方で空き家バンクでマッチングをやっているが、なかなか行政が入っても、最終的に契約ということになると、民事は介入できないとかいう話になり、それを社会福祉協議会にやってくださいというのも、行政からもなかなか言いにくい。まちづくり協議会からお願いするにしても、本当にどれだけの需要があるかどうか、需要と供給のバランスということになる。空き家があるから全部利活用できるかという、そうでもなく、利活用できるようなものは空き家にならない。利活用したくてもできないようなところで、利用されなく、ボロボロになって隣近所に迷惑をかける状態が非常に多くなっていることが一番大きな問題である。国交省でも、空き家の利活用に向けて、建築基準法上の問題点を改正することも聞いているが、一番のネックは、消防法など、一般住宅を食堂にするにしても、警報装置などの費用が非常にかかる。単に住宅を住宅として利用するのであればあまり問題ないが、店舗などにしようとする、建築基準法でいえば、非常用照明装置や排煙装置などいろいろな制約があって、それをしないと営業許可がおりないということになる。空き家の利活用といっても右から左にできるようなことではないため、その前からなるべく空き家にならないように、空き家になっても、利活用を前提として、周りでサポートすることが大事かなと思う。社会福祉協議会にやってくれというようなことを、どちらからお願いをするかということになる。

内山会長：そういうことではなく、そういう事例もあるので、参考にされたいかがですかということである。田舎の家は、住んでいた人が亡くなって、息子が東京に出ていたら、そのままそっくり空き家になるので、煮炊きができないことはない。立派なものである。

河島支所長：菊川町は空き家バンクの登録がない。豊北豊田はあるが・・・

ご存知のように人が住めなくなった家は一機に老朽化してしまう。県外から盆正月に帰ってくるときにでも・・・まず、戸が開かない。

一番のネックは、仏壇で、人に家を貸すということは、仏壇を除けてもらう必要がある。その部屋だけ使わないでくれという話もあった。そうすると、借りる方もむづかしくなるので、そこを整理さえすれば、ネットバンクであるため、移住したい

という人は、今の時代であるので、ネットで全部わかるので、登録さえすれば問い合わせはある。

県外からもあるし近隣もある。農村部であるため、家もあって庭もあって、プラス畑もある。畑があると、あとで迷惑かもしれないが・・・

そういう情報は地域政策で受けており、本庁の企画で整理しているので、情報があれば提供をお願いしたい。

池本副会長：産業、特産品、観光で、農業関係が高齢化など、いつも叫ばれていることが出ている。観光のことが出ている。意見があればお願いしたいが、予定の時間を過ぎている。

さきほど申したように、何人かの人が意見を出されているが、整理して結論を出すということではありませんので、何かあればお願いしたい。

最後のその他で、なぜまちづくりをするのかと私が書いた、悪い意味で書いたのではない。

もう少し考え直した方が良いのではと思う。よく聞くのが、まちづくり協議会は何をしているのか、何もしていないという意見が多い。まず、第一に課題や状況をお互いに認識しないといけないのでは。役割、任務を協議する。行動目標を定める。今まで2年間やっているが、中途半端になっているため再考した方が良い。

もうひとつ、各部会があるが、自治会長の出席率をはっきり言って非常に悪い。どうしてもまちづくりには、自治会長の参加が不可欠であるため、対策が必要であると考え書いた。

5時30分から交流会を予定しているため、懇談会のテーマは、今日結論を出してどうするものではなく、こういう意見があったよということで止め、今後、2回、3回とするうちに、いろいろ具体的に出て来るだろうと思っている。

閉会

池本副会長：以上で懇談会を終了するが、いろいろな会合を通じて、懇談会をやったことや、中身を皆さんに連絡するような方法は考えたい。

時間の都合で十分な発言ができず、金田さんへの質問等もあったと思うが、交流会で歓談していただきたい。